

本論は、中国の都市空間の様子を描いた二つの絵巻の図像の意味論的解明を行ったものである。対象とした絵巻は北宋の開封を描いた「清明上河図」と清代の蘇州を描いた「盛世慈生図」である。この二つの絵巻は、いずれも都市の人々の生活を生き生き描いたもので、当時の都市生活や都市風景を知る上でも貴重な資料と言える。

本論の筆者は、絵巻を記号の体系と捉えている。絵巻に描かれた様々な景観要素を取り出し、それらの出現頻度や出現時における他の景観要素との関連などを統計的な方法も援用しながら綿密に分析し、景観要素がどのような意味を担っている（担いうる）かを明らかにしている。

本論は5章と各章の結論をまとめた終章から構成されている。

第1章では、研究の方法論を概説している。表層論的な観点と記号論的観点を導入し、関連既往研究を概観している。

第2章では、最初に中国の都市絵巻図を歴史的に概観し、描写内容と閲覧の可能性から対象とした2つの絵巻が選ばれたことを説明している。続いて、描写対象である、北宋代の開封と清代の蘇州の都市構造などについて全体的な説明を行っている。最後にこれらの絵巻がどの程度に、当時の状況を表現しているかについて検討して、信頼おける資料であることの確認をしている。資料の公開が不十分な中国にあっては研究上の様々な限界もあり絵巻の内容の真実性の検討としては必ずしも十分とは言えない。しかし意味を扱うという目的にとっては十分な検討とあってよい（対象を正確に描いているかではなく、対象の意味の違いを描き分けているかが問題になるからである）。

第3章では、二つの絵巻の内容を、街路、点景、表層に分けて景観の形態要素を取り出している。合わせて、絵巻に描かれた画像から描写対象地区を平面図として推定復元している。また、図中の看板などに書き入れられた文字、点景の配置、人の振る舞いなどから、建物（正確には表層）の用途を推定している。最後に、抽出された形態要素の出現頻度から、それぞれの都市の風景の定量的傾向を読みとっている。

第4章では、意味構造の分析を行っており、本論の中心的な章である。意味分析は、最初に、形態要素の成分分析により形態要素の意味作用上の役割を、共通成分、補助的成分、示唆的成分に分けて捉えている。これにより表層の一般型を取り出し、単純な記号の組み合わせにより多様な景観と意味を創り出している様子を説明して

いる。続いて、特定の形態要素が組み合わされて新たな意味が生み出されている様子を、要素の出現の相関から見ている。こうして抽出された（絵巻のなかの）都市景観の意味の要素が相互に関係しあって、全体としてはどのような意味の構造を作り上げているかを、数量化3類を使って解釈を試みている。「身分の上下」と「賑やか／開放的－静か／閉鎖的」の二軸を提示し「清明上河図」では「素朴な表層」、「立派な表層」、「閉鎖的な表層」、「官的な表層」の4類型を、「盛世慈生図」では「素朴な表層」、「立派な表層」「官的な表層」の3類型を上げている。最後に、これらの意味づけられた形態要素を絵図に戻して、どのような空間配置になっているかを検討し、両図の時代の違いから意味構造の歴史的变化に言及している。

第5章では、二つの中国の絵巻から得られた意味構造に関する知見をベースに、日本の絵巻である「洛中洛外図」と「江戸図屏風」を比較して、日中の都市景観を比較している。

本論はこの種の研究として正統的な手続きを踏んで検討、論述されており、日本語による記述も簡潔でかつ適格である。その点で過不足は無い。また、形態要素の意味の分析は多面的に検討されており、その点でも研究方法として十分である。一方、分析結果（絵画に描かれたも要素の意味）は常識的な理解を大きく超えるものではなく、その点で本論の評価が分かれるかもしれない。このような結果は絵画のなかの形態要素のみから意味を探るといふ本論で採られた方法の限界と言える。その意味で、より豊かな意味をくみ取るためには研究者の側での幅広い歴史的知識が欠かせないことは言うまでもない。しかし、一方で、形態要素の描かれ方の統計的分析からだけでも、現在の知識に照らして十分合理性のある意味が析出されたということにこそ、この研究で取られた方法の妥当性と可能性を証明していると見るべきであろう。

本論の貢献は、都市風景における意味分析の方法の有効性を明らかにし、絵画資料への適用方法を示したこと、および中国の近世都市の風景の意味構造を明らかにしたことこの3点にある。なお、5章で行われた日中の絵巻の比較は、今後の研究の展開を示唆するために挿入されたとみるのが妥当である。

以上みていったことから、本論は博士（工学）の学位請求論文として合格として認められる。